

梅津忠兵衛

梅津忠兵衛は非常な力量と勇氣のある若い武士であつた。彼は戸村十太夫と云ふ地頭に仕へてゐた、その居城は出羽の國横手の近傍の高い山の上にあつた。家中はその山の下に小さい町をつくつてゐた。

忠兵衛は城門の夜番に選ばれた一人であつた。夜番には二通りあつた、——第一のは夕方に始まつて夜中に終り、第二のは夜中に始まつてあけ方に終るのであつた。

或時、忠兵衛が第二の夜番に當つて居る時、不思議な事件に遇つた。眞夜中に夜番の務めにかうとして山を上つて居る間に、彼は城の方へ行く曲つた道の最後の曲り角に一人の女が立つて居るのを見た。彼女は一人の子供を抱いてゐて、誰か人を待ち合せて居るやうであつた。そんな時刻に、そんな淋しい場所に女の居る事は、最も特別な事情でもなければ、説明のできない事であつた、そして忠兵衛は化け物は暮れてから人をだまして殺すために女の姿になる事を思ひ合せた。それで彼は目の前の女と見える物も本當に女であるかどうかを疑つた、それで彼女が彼の方へ話しかけるやうに急いで來たのを見て、彼は一言も云はないでやりすごさうとした。しかし、女が彼の名を呼んで、甚だやさしい聲で、つぎのやうに云つた時に、彼は餘り驚いてさうはでき

なかつた、——『梅津殿、私は今夜大層困つてゐます、そしてせねばならぬ難儀な務めがありま
す、どうかほんの暫らくこの子供をもつてゐて下さいませんか』そして女は子供を彼にさし出
した。

忠兵衛はこの大層若さうに見える女を知らなかつた、彼はその魅力のある知らない聲を怪しん
だ、超自然的誘惑を怪しんだ、何でも怪しんで見た、——しかし彼は元來深切であつた、そして
化け物を恐れて、深切なる行爲を控へるのは卑怯だと思つた。返事もしないで子供を受取つた。

『歸つて来るまでもつてゐて下さい』女が云つた、『すぐ歸ります』もつてゐませう』彼は答へ
た、それから直ちに女は彼からふり向いて、彼が殆ど自分の眼を疑つた程、軽く、早く音もさせ
ずにその道を離れて、飛ぶやうに山を下つて行つた。忽ちのうちに彼女は見えなくなつた。

忠兵衛はその時始めて子供を見た。餘り小さくて、生れたばかりのやうに見えた。抱かれたま
ま甚だ靜かにしてゐた、少しも泣かなかつた。

不意にそれが大きくなるやうに思はれた。彼は再びそれを見た。……否、それはやはり小さい
物であつた、そして動きもしなかつた。何故大きくなつたと思つたのであらう。

そのつぎにその理由が分つた、——そして彼は全身ぞつとするのを覺えた。子供は大きくなる
のではなかつた、それは重くなるのであつた。……始めのうちそれはただ七八百目のやうであつ
たが、つぎにその重さが次第に二倍になり——三倍になり——四倍になつた。もう五貫目より輕
い事はないと思はれて來た、——そしてやはりそれが重さを加へて行つた。……十貫、——十五貫、

——二十貫。……忠兵衛はだまされた事を知つた、——彼は人間と話したのではない事、——その子供は人間でない事を知つた。しかし約束は約束だ、武士たる者は約束を守らねばならない。そこで彼は子供を抱いてゐた、子供は刻々重くなつた、……三十貫——四十貫——五十貫。……どうなつて行くのか見當がつかなかつた、しかし彼は恐れない事、力の續く限り子供ははなさない事を決心した。……六十貫、——七十貫、——八十貫。彼の筋肉は緊張の餘り震ひ始めた、——それでも重さが増して行つた。……『南無阿彌陀佛』彼は叫いた——『南無阿彌陀佛、——南無阿彌陀佛』彼がこの唱名を三度目に唱へた時、その重さは一時に消えた、そして彼は空手でぼんやり立つてゐた、——即ち子供は不思議にも消えたのであつた。しかし殆ど同時に、その不可思議な女が、行つた時のやうに、又早く歸つて来るのを見た。やはり息をきらしながら、彼女は彼のところへ來た、その時始めて彼は彼女が甚だ美しい事を見た、——しかし彼女の額に汗が流れてゐた、そして彼女の袖には、今まで働いてゐたやうに、たすきがかかつてゐた。

『梅津殿』彼女は云つた、『甚だ大きなお蔭に預かつた。私はここの氏神だが、今夜氏子の一人がお産をするので、私に助けを祈つた。しかしその骨折は中々であつた、私一人の力では、その氏子を助ける事ができない事が分つた、——それでお前の力量と勇氣を見込んで頼んだわけだ。そしてお前の手に置いたのは未だ生れ出ない子供であつた、それから始めて子供が段々重くなつて行くのを覺えた時分は、産門が閉ちてゐたので大層危い時であつた。子供が餘り重くなつて、もうこれ以上その重さにたへられないと絶望した時、——丁度その時、母が死んだやうで、一族

の者皆泣いたのであつた。その時「南無阿彌陀佛」の唱名を三度お前が唱へてくれた、——そして三度目に、佛の力が助けとなつたので、産門が開いた。……それでお前のしてくれた恩は、適當に報じたい。勇氣のある武士に取つては力量より有用な物はあるまい、それ故お前ばかりでなく、お前の子供にも、子供の子供にも、大力量を授ける事にする』

それから、この約束をして氏神は消えた。

梅津忠兵衛は非常に不思議に思ひながら、城の方へ進んだ。勤務を終つて、朝の祈りをする前に、いつものやうに顔と手を洗ひにかかつた。使つてゐた手拭をしぼらうとすると、その強い物が二つにきれたので驚いた。そのきれたのを重ねて、しぼつて見た、丁度ぬれ紙のやうに——又それがぎれた。彼は四枚重ねてしぼつて見たが、結果は同じであつた。やがて、唐金や鐵の色々の物を扱つて見ると、粘土のやうに彼の思ふ通りになる事を見て、彼は約束の通り大力量を充分に授けられた事、それから物に觸れる時注意しないと手の中でつぶれる事をさつた。

うちに歸つてから、その夜その土地で出産があつたかどうかを尋ねて見た。そして彼は丁度その事件のあつた時刻に出産のあつた事、それからその事情は氏神から聞いた通りであつた事を知つた。

梅津忠兵衛の子供等は父の大力を相續した。彼の子孫の多くは——皆著しく強い人々だが——

今この話の書かれた時、出羽の國に未だ住してゐた。

The Story of Umeitsu Chuoei. (A Japanese Miscellany.)

(田部隆次譯)